



子どもの本から

本に願いをこめて

皆川 美恵子

『ヘンシヨーさんへの手紙』は、一人の男の子の手紙と日記だけで（もちろん虚構ですが）構成されている、斬新な手法による児童読み物です。アメリカの読書指導の背景も窺え、教育実践の面からも興味深い作品です。しかし何といても、読書をキッカケとして子どもが作者へ手紙を書く、やがて手紙を

書くことから日記を書き出し、自分の世界を作り上げてゆく子どもの成長ぶりが、文章によって浮き出されているのが魅力的です。

小学二年生の男の子、リー・ボッツは、先生が教室で読んでくれた本『犬をよろこばせる方法』の作家ヘンシヨーさんに手紙を書き、「とてもおもしろ

かったです。みんな、さいこうに気に入りました」と伝えます。三年生になると、自分一人で読んだことをヘンショーさんに知らせます。

四年生の読書週間には、愛読書となったヘンショーさんの本の中身を立体模型のジオラマに仕立てます。すると先生は、作家に手紙を書くようにと指導し、リーは手紙を書いて今度は自筆の返事をもりたいと伝えます。五年生のリーは、読書感想文を書き、Aマイナスの成績をもらったこと、そして他の作品も読み出したことをヘンショーさんに知らせています。

ところで六年生になると、両親が離婚し、リーは母親と共に引越をして転校します。新しい学校でも先生は、作家に手紙を書いて、作家についてのレポートを書くようにと課題を出しています。

さてヘンショーさんは十の質問に答える返事をくれますが、「好きな動物は」の質問には、「レポートをかくために図書館を利用しないで作家に質問だら

けの手紙を送ってくる子どもたちを食べてしまう、むらさき色の怪物」と答え、指導の先生の顔色を変えさせています。さらには、リーに対しても、今度はヘンショーさんから十の質問が寄せられます。

①きみはだれか？ ②きみの見かけはどうか？

▲「ヘンショーさんへの手紙」

B・クリアリー作 谷口由美子訳

むかいながまさ絵 あかね書房 一九八四年



③きみの家族は？ ④住んでいるところは？

⑤ペットを飼っているか？ ⑥学校は好きか？

⑦友だちはいるか？ ⑧好きな先生は？

⑨きみをなやませているのは？ ⑩望むことは？

ヒゲを生やし、アラスカに住む若い男性という児

童文学作家ヘンショーさんは、父親と別れてさびしく暮らすリーの心の世界に、このように手紙を通じて深く入り込んでいきます。長距離輸送の大型トラック運転手をしている父親は、電話をくれるという約束も守ってはくれません。手紙に対して律儀に返事をくれたヘンショーさんへ、質問に答えるリーは、一生懸命、自分は何ものか考えてゆきます。両親の離婚の真相は何であったのかも、手紙を書くことによつて見つめてゆくことになります。

やがてヘンショーさんにすすめられるまま、リーは日記を書き始めます。文章が何も思い浮かばないリーは、ヘンショーさんに宛てて手紙を書くつもり

として、一日の出来事を日記に書き留めます。こうしてリーは、学校の文集に投稿した作文『父のトラックに乗った日』が、特別賞に選ばれるまでに書く力や、自分の内面を見つめ表現する力が養われてゆきます。

ところで、この本の作者ベバリー・クリアリーは、ヘンリー君と犬のアバラーとの出会いを描いた『がんばれヘンリーくん』（一九五〇年刊）をはじめ、ヘンリーくんシリーズで人気を博した一九一六年生れの有名な女性児童文学作家です。ユーモアのセンスに溢れる両親のもとで、屈託なくのびやかに育つヘンリー君は、当時のアメリカの理想とする家庭の、理想の子ども像でした。しかし本作品（一九八三年刊）は、崩壊家庭の子どもリーを主人公としています。

リーは母親に、なぜ離婚したかを尋ねると、母親は自分の生い立ち、父との出会いと恋愛、トラック

での移動生活を語り、結婚が早すぎたこと、父は歳月を重ねても全く成長しなかったことを説明します。父親に対し、ひとつひとつ思いあたるリーですが、それでも大きなトラックの高い運転台に父親の隣りに坐り、ブドウを積んで高速道路を走った思い出を作文に書くことからわかるように、父を大切に慕い続けています。

リーはヘンショーさんには、一度も会ったことはありません。しかし、本をめぐる手の紙のやりとりを通じて、ヘンショーさんは実際の父親以上にリーをしっかり受けとめ、リーの心を揺さ振り、励まし勇気づけ、リーをさらなる高みへと導いています。まるであのヘンリー君が、ヘンショーさんとリーの名前におさまっているかのように、二人は理想的な大人の作者と、子どもの読者として配置されているのです。

アメリカの児童図書協会（CBC）では、全米児

童図書週間を一九一九年から始めて七十五周年を迎えた年、七十五年間の七十五点のポスターを集めて記念出版しました（邦訳『本に願いを』BL出版）。絵本画家が絵筆をふるって本への願いをこめたポスターは、大人と子どもが織りなしてきた美しい歎の歴史をも伝えています。

本作品も、長年子どもの本を書き、子どもたちに贈り続けてきたクリアリーが、読書がいかに人間の心を癒し、心の糧になるか、本にこめた願いを語っています。作家が本を通じ、子どもとしっかりつながることを祈ってやまない、クリアリーの夢みる祈りのかたち、そのまま本となった珠玉の力作です。

（舞々同人）